

船頭たちの笑い

赤尾憲一

一、西部への移民とオハイオ州

十八世紀後半、アメリカ東部のヴァージニア地方やカロライナ地方の住民たちが、ダニエル・ブーンやデイヴィ・クロケットたちによって先導されて、西方のケンタッキー地方やテネシー地方に進出し始めていたころ、その北隣のペンシルバニア州やニューヨーク州でも西部移住はさかんになり、人々は険阻な大自然や、そこに住む原住民（インディアン）の必死の抵抗にもかかわらず、ちょうど潮が岸辺へ押し寄せるのを誰も防ぐことができぬように、あらがいがたい勢いとなって西へ西へと進出していった。そういった移動の波の最先端は一七七〇年ごろまでに、オハイオ川とその上流のアレゲネー川の北岸にまで達していたようである。前章で、ダニエル・ブーンやデイヴィ・クロケットといった先導者たちを先頭に、多くの人々が「荒野の道路」と呼ばれた新設の道路を通して、ケンタッキー地方へ進出したことについて述べたが、移民たちの数そのものについていえば、圧倒的に、もっと北方の地域——具体的にはペンシルバニア州やニューヨーク州などの地域——を通過して西方へ移動していった移民の数の方が大きい。フィラデルフィアあたりから

の移民は、まず輓馬車や徒歩で西行して、アレゲニー川とモノンガヘラ川——いずれもペンシルバニア州——の合流点を目指した。この合流点にピッツバーグがあり、このためピッツバーグは西部への入口となつて、押し寄せる移民で雑踏を極めたようだ。彼らはこの町で馬車から船に乗りかえてオハイオ川を下った。

他方、一八一八年には、フィラデルフィアからカンバーランド（メリランド州）を通過してオハイオ川河畔のウィーリング（ウエスト・バージニア州）へ通ずる国道が完成し、オハイオ方面へ進出する大道となつた。この道路はフィラデルフィアより更に南にある、ボルティモアやワシントン方面から西部に移動するときにも大いに利用され、移民たちはフィラデルフィア方面からの移民同様、船に乗りかえてオハイオ川を下った。こうして何千何万という家族が彼らの貴重な財産——家畜、家具、農機具、食糧——を川船に積みかえてオハイオ川を下り、前途に広がる広大な富める未開の土地を目指した。

二、船頭の王様——マイク・フィンク

さてこうした建国に伴う混乱の中から、それまで見られなかったタイプの人々が登場することとなつた。これらの移民たちを運ぶ川船の船頭たちである。言うまでもなく彼らなしでは川下りではできなかったからで、船頭たちははなはだ重要な職業となつた。彼らの数はオハイオ川を上下する船の数に比例して増えた。独立戦争に参加した元軍人や、インディアン・スカウトや、冒険を求めた農家の子弟や、北方からやってきた明るい性格のフレンチ・カナディアンといったところが船頭たちの前身だつた。彼らなしでは前進はままならなかつたが、更にも上これらの船を利用して前進した移民たちが、オハイオ川流域のあちこちに定着して、そこで開拓が進むとその初期開拓地の農産物——小麦、大麦、

カラス麦、とうもろこし、リンゴ酒、ウイスキー等々——を下流地方に輸送するという更に大きい仕事がこの川船と船頭たちを待っていた。そんなわけで、一七七〇年頃から一八三〇年頃にかけて、牧歌的雰囲気のおハイオ川の上を平底船、中広平底船、竜骨船、大筏といった様々なタイプの川船が終日引きも切らず上下したらしい。こうして彼らは川船が蒸気船にとって代られるまでの一時期、西部発展になくはならぬ主役となっていた。

ところで当面本稿において考察の対象であるところの西部の笑いの担い手の中心的存在になったのは、なんとこれらの川船の船頭たちであった。もちろん一般の開拓民の中にも笑いはいとして湧きあがっていた。がしかしその激しさ、華やかさ、そして後世の物語文学作品への影響といった点で、群を抜いて華々しかったのは船頭たちの笑いであった。そこで本稿では、彼らの生み出した笑い、そのユーモラスな言動や、彼らにまつわるユーモラスな物語等に入る前に、いったい船頭たちは、そもそもどんな連中だったのかをのぞいてみることにしよう。さいわいなことに、彼ら船頭たちの性格や言動について、マーク・トウェインがその著『ミシシッピー河上の生活』の中で活写しているので、まずそれを引用してみることにする。

「……荒っぽくて、向う見ずな男たち。横暴で、無教育で、勇気があり、水夫のようなストイシズムをもち、おそろしい困難に耐え、大酒飲みで「岡の下ナチーズ」のような、いかかわしい場所で浮かれ騒ぐ連中。大のけんか好き。無茶で、例外なくやたらと陽気で、汚ない言葉が好き。野卑で、金使いが荒く、旅の終りには一文なしで、激しく、とてつもなくほら吹きで……」

とトウェインは、激しいが好意的な筆づかいで彼らのことを描写している。彼らの生活は危険にみちたものであった。おハイオ川は比較のおだやかな川であったらしいが、それでも数多くの航行上の難所があったし、ことに下流のミシシッピー川は「性悪川」と呼ばれたように川筋がしばしば変わったばかりか、川底には川船にとって大きい脅威であった、

先端が鋸の歯のように尖った沈み木がかくれている、いつ何時船底をつき破って船を沈没させるか予測がつかなかった。旅行者はあちこちに、流れに浮かぶ船頭や乗客たちの死体や、難破船の残骸を見た。またそういった自然の脅威に劣らずぶっそんな敵がいた。それは川賊とも呼ばれるべき盗賊の一味で、随所にかくれて積荷を狙い、ために船乗りたちで命をおとすものも少なくなかった。船頭たちは命をかけて、わが身や積荷を守るために、これらの川賊たちと激しく戦わなくてはならなかった。船頭たちの荒々しい性格、行動の背後にはそういった事情があった。

荒くれた性格とならんで彼らを目立つ存在にしていたのは、彼らの大言壮語癖と、すぐれた射撃の腕前だった。どの船頭も多かれ少なかれ大言壮語の名手だったようだが、それは外界からの弾圧に対する、言葉と絶叫による自己主張だったといえるであろう。この点については後で詳しく触れるのでここではこの程度にとどめるが、もう一つの彼らの特色は、いずれも射撃の名手だったことである。もはやインディアンは西方に駆逐され、昔日の脅威はなくなっていたし、船頭である以上ケンタッキーやテネシー地方におけるように、森の中を駆けて野性の動物たちを狩猟するという必要もなくなっていたが、川には川特有の危険があり、先にもちょっと触れたように、川船の積荷を狙う川賊——リバー・ラット——ともいうべき新種の盗賊たちが流域のあちこちにたむろして川船を狙っていた。ジョン・A・マレルとか、隊長カミラとかいった歴史書や文学作品にも登場する陰惨な殺し屋たちが川船の積荷を狙って跳梁していた。そういった極悪な悪人どもに対抗して身を守るためにライフル銃は不可欠のものであった。そして彼らは暇なときは、射撃の腕前を競い合うという遊びの精神もち合わせていた。頭上にウィスキー入りの缶をのせて撃ち落とし合ったり、他人の頭の大辺の一房の髪の毛を撃ちとばしたりするのが彼ら船頭たちの無二の楽しみであった。

さてこうした船頭たちの中で最も有名で華やかな存在だったのがマイク・フィンク（二七七〇—一八三三）である。フィンクはオハイオ川上流のピット砦近くの集落で生れた。両親はスコットランド系アイルランド人だったが、彼らの

住む集落はまもなくピッツバーグという名前がつけられた。少年時代は両親の堀立小屋で過したが、成長するに及び対インディアン戦争のスカウトになった。彼の鋭い感覚と何よりもすぐれたライフル銃の腕前が買われてのことだった。しかし激しかったインディアンの抵抗もやがて弱まり、彼らがミシシッピー川の西方に消えてゆくと、マイクは他のスカウトたちとともに、その頃ようやく隆盛期を迎えようとしていた川船の船頭となった。そしてほどなく頭角をあらわし「竜骨船（キール・ボート）の王」とか「オハイオ川のかみつき亀」などと呼ばれるようになる。やがて蒸気船が川船にとって代る日がやってきた。フィンクは船頭をやめ当時セントルイスで華々しく募集していたウイリアム・アシュレーを隊長とする毛皮隊に参加して、ロッキー山脈方面へむかうことになる。そこで彼は不本意な晩年を送り、結局仲間一人に殺された。彼の最も華やかだったのは船頭時代であった。

フィンクの超人的能力については数々の伝説が生れ、語りつがれているが最も有名だったのは射撃の腕前が極立って優れていることであつた。数々の逸話が彼の腕前について生れている。ニグロの足のかかとの、ちょっと突き出たところを遠くからライフル銃で撃ちあてて「靴をはきやすく」してやったし、横柄なインディアンの頭の天辺の一房の髪の毛を撃ちおとし丸坊主にしてしまつたりしたが、何よりも得意だったのは弟の頭の天辺にウイスキーのコップをのせて、それを三十メートルほど離れた距離からライフル銃で撃ちおとすことであつた。

こんな数々の超人的能力ゆえに、フィンクは民衆の想像力にはぐくまれて、生前すでに半神にまつりあげられるほど、荒々しく英雄的で誰の手にも負えぬ船頭であつた。

三、代表的作品の数々

最初にあげなくてはならないのは、名もない船頭たちのユーモアである。先にもちょっと触れたが、船頭たちのユーモアについてもマーク・トウェインが、その著『ミシシッピー河上の生活』（第三章）の中で活字しているので、ここでもそれを先ず引用してみることにしよう。

「ミシシッピー河上の生活」第三章より

「うーいっ。おれさまこそアーカンソー生れの鉄のあごと真鍮の足と銅の腹をもった死体製造人だあ。おれ様をよく見てくれ。おれは皆なから「急死」だとか「荒廃將軍」だとか呼ばれている男だ。おやじはハリケーンで、おふくろは地震、コレラは腹ちがいの弟、おふくろの側には天然痘の身内がいる。おれをよく見てくれ。元氣なときは朝飯に一九匹のわにとウイスキー一樽、病氣のときでも一ブッシェルのガラガラ蛇と死骸一人分を食わずにゃいらねえ。ひとにらみで苔むす大岩もくだいちまうし、声は雷よりでっかいぞー。うーいっ。さあ、うしろへさがって、おれ様の力にふさわしい余地をあけてくれ。血はおれ様の大好物、死にかけた男のうめき声は、おれには妙なる音楽だ。さあ、よく目をあけて、はいつくばって息を殺しているがいい。これからそっちへ出かけていくからな。」

こんな風にどなっている間中、男は首をふり、恐しい顔付をし威張り散らし、ぐるぐると小さい輪をえがいて歩きながら、シャツの袖口をたくし上げ、時々背筋をぴんとのばして、握りこぶしで胸をたたいて、「このおれ様を見てください、紳士諸君」とどなった。それが終ると、飛びあがって三度かかたとを鳴らし「うーいっ。おれ様ほど血に飢え

た山猫はいねぞ／＼とどなった。すると列のはじにいた男が古ぼけた、縁の垂れ下がったソフト帽を右目の上まで引っぱり下げた。それから彼は体をかがめ、背中をまるめ、尻をぐいっとつき出し、こぶしを身体の前で出したり、引っこめたりした。そして三度ほど小さい円をえがいて歩きまわって、威張り散らし激しく息をした。それから体をぴんと伸ばしたかと思うと、飛びあがって足が床につかぬうちに三度かかとをうち鳴らした（みんなはわっと歓声をあげた）。それから次のようにどなりはじめた。

「うおーっ。頭を下げてはいつくばれ。悲しみの国がやってくるぞっ。おれを地上におさえつけてくれ、力が体になまぎってきたようだ。うーいっ。おれは罪の子だ、おれを縛りつけておいてくれ。みんなくもりガラスをもつがい。肉眼でおれを見ないでくれ。おれは遊びたくなると経度の子午線と緯度の緯線を引き網代りにして、その網を大西洋中に引っぱりまわして鯨をとるんだ／＼ 頭がかゆくなったら稲妻で頭をかくし、のどをごろごろ鳴らして雷といっしょに眠るのさ。寒いときはメキシコ湾をわかして風呂呂に入るし、暑いときは彼岸風で涼むのさ。のどが乾いたら登って行ってスポンジみたいに雲をからからになるまで飲みほすし、おれが腹べこでその辺をうろつきまわると、飢餓がおれのあとをついてやってくるぞっ。うーいっ。頭をさげてはいつくばれ。おれは太陽の顔に手をあてて夜のように暗くしてしまふぞっ。おれは月にかみついて、ひとかけらかみ切るし、季節の変化を早くしてしまふぞ／＼ おれが身ぶるいと山崩れがおきるぞ／＼ おれを見るときは皮製の目がねを目にあてるがいい——肉眼でみないでくれ。おれは化石になった心臓とボイラーのような鉄製の胃袋をもった男だ。あっちこちの村や町を皆殺しにするのがおれの楽しみだし、いろんな国をぶっつぶすのが、おれの一生のまじめな仕事さ。大アメリカ砂漠という果しない広がりがおれの土地なのさ。おれはこの土地におれがぶっ殺したものどもを埋めるのさ。」彼は飛び上り空中でかかとを三回ならし（皆はここでまた拍手喝采した）、そして落ちてきながら、また叫んだ。「うーいっ。頭を低くしてはい

つくばれ。大惨禍のお気に入りのおれ様がいくからな。」

次にマイク・フィンの言動にまつわるものとしては、何といっても頭上のコップを撃ちおとす話が有名であるが、以下はモーガン・ネビルの『船頭の最後のもの』の一節である。マイクの超人的離れ業が、あたかも日常茶飯事であった模様が不気味なくらい淡々と描写されている。

「コップを撃ち落とすこと」

二、三時間航行すると、われわれは「燃料積込場」という名前で知られている停泊地の一つに着いた。そこはレタート滝の少し上流にあった。蒸気船はパイロットの操縦するままに、本流の上の方を島に向けて優美に半円を描いて接近し、燃料である木材の山に近づいた。船が岸に近づくと、はき出された蒸気がまるで檻の中のいらだっている虎のようなうなり声をあげ、森や丘にこだました。水面下に一本の木の根っこがあって、そのため船は十分に岸に接近できず、別な場所につけるために權を使うことが必要になった。

「後退だ、お仲間よ。もう一度やってみる。」と岸から誰かが叫んだ。「もっと竿をはなしてさして、ふんばるんだ。さもないと沈み木にぶつかってしまふぞ！」

これはオハイオ川の上では、われわれが昔からよく知っている言葉だった。それは竜骨船の船頭たちの仲間言葉の見本のような言葉だった。

岸からどなった男は、たちまち甲板上の十人を越す乗組員から拍手喝采されたが、私はその男の顔の中に、少年の

時からよく知っている一人の友人の面影を認めた。彼は一本の大きい樺の木にのんびりと寄りかかっていた。そして彼の左腕がゆっくりとライフル銃を身体の脇に引き寄せたとき、あのイタリアの画家サルバトーが、そこにいたら野性的で暗い絵のためのモデルとして選んだかもしれない一人の男の姿がはっきりと現われた。彼は身の丈六フィートを越え、完全に均勢のとれた体格で、ヘラクレスにも劣らぬ力をもっているように見えた。初めての人には完全に黒人との混血児に見えたことであろう。オハイオ川で長い間太陽の光にさらされたため、皮膚の色がすっかり変っていたのだった。そのため立派なヨーロッパ的目鼻立ちがなかったら、さる有力な種族第一の戦士と思われたかもしれない。少なくとも五十才にはなっているはずだったが、髪の毛は鳥の羽のように真黒だった。肌には直接、赤いフランネルのシャツを着、その上に白くふちどられたブルーの、ずきん付長外套を着ていた。モカシンをはき、腰のまわりには巾広の皮製のベルトをしめ、そこからさやに入った大きいナイフがつるされていた。

船が停止すると船室にいた乗客たちは岸に飛びはねるようになってあがった。土手をのぼってゆくと、さき程私が述べた男が私の方へやってきて手をさし出した。

「元気かい、マイク？」私は言った。

「君も元気かい？」とこの船頭はこたえて、私の手を握ったが、それは鍛冶屋の万力のようにとてつもなく力強いものだった。

「君に合えてうれしいよ。お仲間よ。」と彼はぶっきらぼうに続けた。「おれはこれからクォートのコップを撃ち落とすつもりなんだ——すぐにだ——君にはぜひ審判員になってもらいたい。」

私にはマイクの言うことがすぐ分った。もしこれがほかの場合だったら、無茶なことをするな、と反対するところだった。がしかしこの時は、二、三人のイギリス人の旅行客を案内していた。彼らはボウ・ベルの河口から上流へい

ったことはない連中だったし、その上アメリカ西部の風俗習慣について観察記を書くとうとしていた。また船客の中にはフィデルフィアやボルチモアからやってきた連中も数人おり、こいつらときたらチェスナット通りやハワード通りにまさる所は、この世の中にないと考えたり、ルビカム・レストランの料理をべたばめにしたり、西部では食用の亀もかきも見当らないといって、大いなる失望感を表明したりしていた。私の野蛮な誇りが眠りからさまされた。私は彼らに西部のライオンを——マイクはまさしくライオンだった——見る機会を与えてやろうと決心した。情け深い方々は、私に人間性が欠けているとお叱りになるかもしれない。この非難はお受けできないが、言い訳がわりに、あの人間性について最もよく理解されている本性の一つを思い出していただきたいと、ここでは申し上げるとどめたい。

マイクはというと、仲間の何人かを従えて、船着場から少し離れた樵の木の方へ進んだ。私はこれからおきる情景を見るため仲間の船客たちを呼び寄せた。その場に到着すると、一人の狩猟服に身を包んだ、大柄でがんこそうな船頭が、裸足のつま先で地面に一本の線を引いたが、それは気がついてみるとマイクの弟だった。彼は三十メートルほど歩いていったかと思うと、くるりっと振り向いて、兄の方をむき、腰のベルトにつるしておいたブリキのコップを一つとって頭上にのせた。それを見て私は以前この放れ業を一度見たことはあったものの不安でこまった。その間にも無言の準備がどんどん進められていた。しかし私にはものを考えている暇などなかった。というのもこの弟のアルバートが、

「さあ、ぶっぱなしてくれよ、兄貴。そしてはやくウイスキーを飲んでえよ。」と叫んだからである。

私の「蒸気船上の仲間たち」は、最初の驚きの衝撃から恢復すると、ただちにこの行為をやめさせようとした。しかしマイクは左足を後ろに引き、ライフル銃を弟の頭に向けて水平にした。この水平のまま、彼のライフル銃は、

まるで支える腕が脈博によって全く影響をうけなかったかのように数秒間、びたりと静止した。

「もう少し下の方を狙ってくれ、兄貴。さもないとウイスキーの代金は兄貴が払うことになるぞ。」と落着きはらって弟が叫んだ。

兄貴がこの忠告をきいたかどうか分らない。が鋭い銃声がしたかと思うと、コップは三、四十ヤード吹つとばされて使いものにならなくなっていた。この向う見ずな船頭が無事かどうか見ようと、体を前に押し出していた見物客から、どっと驚きのどよめきがおこった。弟はまるで石からできた彫像のように不動のまま立っていた。弾丸が彼の頭蓋から二インチと離れぬところに当たっても、彼はまばたき一つしなかったのだ。

「マイクが勝ったぞ！」と私は叫んだ。そしてそれが彼らの決まりによると、的になった男が自分の立っている場所から動ける合図であった。普通の賭金が勝たれたときなら、こんな大騒ぎは決しておきなかった。彼らは急いで船に帰っていった。マイクは帰りしな私と友人たちに、ご馳走に加わらないかと誘ってくれたが、私は断って彼らに別れを告げた。しばらくして、私たちは彼らの竜骨船が本流の方にへ先を向けるのを見た——マイクの巨体が、大きい權をまたいでいたし、他の連中は船の先端から船尾までほとんど船全体をおおって、貴重な荷物を入れてある船室の前で、それぞれ仕事にとりかかっていた。岸边をはなれるとき彼らはインディアン流の叫び声をあげ、それからんでんわれわれに歌を歌い出した。その最初の一節は次のようなものだった。

ぶなの權をこぐのはしんどい／

船はゆっくりと進む／

はるばるとシヨーンータウンへ、

ずっと昔の話。

船頭たちの笑い——赤尾

次のかかとを撃つ話はJ・S・ロボのもので、「セントルイス週刊朝報」からのものである。前作と異なりマイクのライフル銃による離れ業もさることながら、いたずらに伴って発生した裁判事件について、マイクの茶目氣ぶりがドラマティックにかかれている。

「黒んぼの足のかかとを削ること」

まだセント・ルイスができたばかりのころ、商業や製造業があつた明るい竜骨船の船頭たちの、くつたかない笑い声を圧倒してしまわなかつたころ、「父なる川」の彼ら素朴な航行者たちは、当時八十フィートもの高さでセント・ルイスの前面の川面から垂直にそびえていた断崖の下に船をつないだものだ。当時も、その断崖の天辺には数多くのいかがわしい酒場があつて、たくましい航行者たちを誘惑し、しばしば飲めや歌えやの底抜けの大騒ぎとなつた。

当時マイク・フィンクは、竜骨船の船頭たちの中の親分格で、セント・ルイスへ商品を運んでいたが、しばしば大騒ぎや無茶苦茶な浮かれ騒ぎで、住民たちの安眠をさまたげた。マイクは西部人には片時も放せぬライフル銃の腕前で有名だつた。「狙つたところはどこであれ、愛銃の「ベツツイ」で当ててみせる」というのが彼の自慢だつたし、仲間たちは彼の腕前を見て楽しんだり、初めての客を楽しませるために、最高に難しいことをマイクにやらせるのが常だつた。

ある日のこと、セント・ルイスの断崖の下流で、二、三人の友人と船の甲板に仰向けになつていて、話題がマイクの最近の腕前のことになり、一人が彼の腕前が以前ほどでないと言ひ出した。これがもとで、そこにいた船頭たちの間で論争がおこり、その会話から話題であつた射撃の仕方が判明した。それはこうだつた——仲間の一人が膝でブ

リキ缶をはさむと、マイクは百ヤード離れたところから、缶の真中をぶち抜いたことがあったというのだった。

「おれはもう二度とお前のために、あの缶を膝にはさまないぜ、マイク」とマイクの腕前に疑問をもちはじめた男がいった。「なぜってうとだな、お前の手にはあの例のかすかな震えが見られるからだよ。いずれ近い中に缶を大きく撃ち損じるだろうよ。」

「撃ち損じるって、とんでもねえノ」マイクは叫んだ。「この罰あたりめが。手が震えるのはお前の方だ。おれが愛銃ベツツイに、目をさますようにさわってやると、おめえなんか弾丸がかみつくんじゃないかと、地べたにへたりこんじまうぞ。」

「おおいとも。スカンクの穴から出るにもいろいろ方法があるように、何とでもいい逃れをするがいいさ。とにかくだなあ、おめえが手の震えを、そんな風にしてごまかそうとするなら、そうするがいいさ。しかしおれはもう二度と、百歩離れておれの權を狙い撃ちするなんて、おめえがでかい口をきいても信用しねえよ。この事は忘れねえようにしてもらいてえ。」

「この臆病者めノ」とマイクは、いきなり立ち上ると船室の入口のところを立てかけておいた愛銃ベツツイの方に手をのびし叫んだ。「百ヤードほど離れたところにいる兵隊を指示してくれ。そいつが「止めてくれ」と叫ぶ前に、そいつの右手の指の第二関節のところを、ふっとばしてみせるからな。」

「兵隊を撃つだって？ アハハハッノ」と皆はマイクをじらすように答えた。「兵隊どころか、あの丘の上の黒んぼのかかとの先っちょも、骨を傷つけずに撃てはしないだろうよ。もうあんまし、ぎゃあぎゃあ言うのはやめてもらいてえよ。」

その黒んぼは崖っ渕で、小麦の樽にまたがり片一方の脚をぶらぶらさせていた。距離は百ヤードばかりだったが、

マイクは「もつといい靴がはけるように、かかとをスマートにしてやろう。」と言いながら愛銃ベツツイをかまえて、ぶっ放した。

黒んぼは飛びあがり、痛いと叫んだが、実際かかと全体がふっとばされていた。マイクはというと、黒んぼの叫びから、彼がほんとうにひどく怪我をしているかどうか確かめようとするかのように、ライフル銃をもったまま黒んぼの声を耳をかたむけていた。とうとうマイクの腕前に疑問をいだいた男が言い出した。

「マイク、そろそろ退散した方がいいぞ。あの黒んぼの持主が鋭い棒をもってやってくるからな。」そして更に彼は皮肉っぽくつけ加えた。「お前の愛銃のかまえ方からすると、愛銃ベツツイの弾は黒んぼの足の骨を傷つけたんじゃないかな？」

マイクは機嫌を損じて皮肉屋に一発お見舞したいといった顔付きになったが、何人かの仲間が我慢するよう忠告しげんこつは警官にお見舞した方がいいと言った。間もなく令状をもって警官があらわれたが、マイクは彼を見ると、途端に逃げる気も抵抗する気も失せ、仲間に、あの警官はなかなか頭のいい奴で「喧嘩ではちょっと手強い奴なんだ」と弱々しく言った。

令状がマイクに示され読みあげられた。マイクは身柄が拘束されてもしょうがない旨伝え、法の執行官にどうぞお先にお進みくださいと言った。警官は歩き出したが、川船から下りようとして、マイクの奴はちゃんとしてきているかな、とちょっと怪しんで振り返って見た。これは賢明な配慮だった。というのは警官はその時、マイクが船の後尾にある小さい船室に逃げこもうとして狩猟着の先端をちらっとひるがえすのを見たからである。その直後船室はびたつと内から鍵がかけられてしまった。残りの船乗りたち全員は、予め決められていたかのように、いっせいに船を下りようとしていた——彼らはいずれも肩に、その辺に散らばっていた道具類をかっつき、戸口をそれらでふさごうと

していたのだ。警官は一瞬立ち止まり、それから船室の入口のところへ行って、マイクに開けるように、力ずくで開けるなど面倒なことはさせないでくれと頼んだ。中から返事はなかったが、何かものすごい音が聞えてきた。とうとう我慢が出来ず警官はどなった。

「よろしい、どうしても開けないなら、煙でいぶり出してやるからな。」といってポケットの火打ち石をたたき始めた。たちまちドアが開き、一人の船乗りがマイクの服を着て出て来た。しかしそれはマイク本人ではなかった。

「おれを探しているんじゃないだろうね、だんな。」とその男は言った。

警官は返事をしないで小さい船室に入りあたりを見まわした。マイクのような大男のかくれる場所はどこにもなかった。ところがつい今しがた、マイクにそっくりな男が出てきた。マイクの奴は、わしが船を下りようとして背を向けた瞬間、服をかえたんだな、そしてさっき下りていったグループの一人が変装したマイクだったんだな、という考えが目まぐるしく頭の中を駆けめぐった。警官は部屋の外へ出ようとして、そのとき鹿皮靴のかかどが、大きいマトの一つの穴から突き出ているのに気がついた。触ってみるとかかとは引っこんだ。手をつっこんでなおも探そうとすると、なんとマイクがいきなり、げらげらと笑い出した。

「くすぐるのは止めてくれ。」と彼は叫んだ。「負けた、じたばたしないで降参しますよ。」

さっきの船乗りがげらげら笑いながら、警官がマイクを隠れ場所から引き出すのを手伝った。彼が船室の外ではなくて中で、衣服をマイクのものに換えたのだった。大勢の船乗りたちも集ってきて、断崖の方へぞろぞろと歩いてゆき、そこで一杯やったあとで治安判事の役所へかたまつて出かけたが、この治安判事は、たまたま初期のフランス人開拓者の中の一人であった。

「あっ、はあ、」彼らがドアを開けて入ってゆくと判事は叫んだ。「またまた大騒ぎをおこした船乗りたちだな。」

ほんとにまあ彼にはどうしたらいいか分らんよ。今度は一体何をしでかしたのかね？」

「判事さん」マイクが口をさしはさんだ。

「わしはあなたから付けを払ってもらうために、こちらの警官のだんなと一緒に伺っただけですよ。」

「わしに付けを払わせるって？」判事はたずねた。「一体お前さんは、それに相当するどんないい事を、この町のためにやったというのかね？ あつはあゝ お前さんは、かかどで砂をけりあげるように、またまた町中を騒ぎにまきこんで、夜眠らせまいとするんじゃないらう？」

皆は熱心に、マイクがこれに対して何と答えるか聞き耳を立てたが、それというのもマイクが判事に対し請求書をもっているとは初耳だったからだ。

「判事さんのお察しの通りですよ。」マイクは言った。「あなたの言われた、そのかかとのことで来たんですよ。わしが町の黒んぼの一人のかかとを一寸削ってやったことで、あなたから謝礼を払ってもらいたいんですよ。わしが、あいつのかかとを一寸直してやったんで、今後あいつの子孫は、ずっとびったし合った靴がはけるでしょうからね。」船頭たちはどっと笑ったが、判事はんかんに怒った。彼は英語とフランス語をごちゃまぜにして、めちやくちゃに早くしゃべったので、何を言っているのかさっぱり分らなかった。

「さっさと法廷から出ていってくれ、この川船のならば者めが！」と判事は大声でどなった。「さっさと出て失せろ。わしはもうお前たちと係わり合いになるのは真つ平御免だ。お前たちは法廷を侮辱しておるのだぞ！」

マイクを除いた皆は外に出てまだ笑い続けたが、マイクは真面目くさった顔で判事に向ってしゃべっていた。

「ところで判事さん。あなたがさ細な笑い事のために、いつもこんな大騒ぎを引きおこすなら、もう今後は何があっても、決してあなたには依頼しませんよ。」

これを聞いて、またどつと笑いが船乗りたちの間からおこった。

「警官君。今直ちに法廷から全員を立ちのかせてくれたまえ。この川のならず者たちめが。まったく法律について何も心得ていないんじゃないから。わしはもうこういった、ごろつき連中とのお付合いは真っ平御免じゃよ。」

「わしらも、こんな法律とやらを、我慢できませんよ。」マイクは言った。「すぐさま町を出ていきますよ。」

「地獄にでも行くがいい！」判事はどなった。

「そりゃねえでしょ。ひよっとすると判事さんの方が偽善者なんじゃないですか？」

激しい言葉と哄笑の中を、マイクは川船に帰ってきた。そこで警官には面倒をかけたことに対して礼をし、かかとを短かくされた黒んぼには痛みを和らげるため一つかみの銀貨をおくった。

四、船頭たちのユーモア——まとめ

船頭にまつわるユーモアについて最も目立った特色は、彼らの大言壮語であろう。船頭の生活は華やかなものではあったが、同時にまたきびしいものでもあった。農夫と違い様々の場所へ行き、そこでの滞在を通して異種の「行事や人間の本質に触れて楽しい思いをしたり、何百マイルを夜昼の区別なく下って雄大な生活を楽しむといった豪快な経験をすることができたものの、何分にも水上の不安定な生活であり、かつ流れにのって下る落ち着きのない生活であったので、様々な危険が彼らを待っていた。川そのものの危険性や川を根城に船頭たちを襲った川賊などとの対抗上船頭たちの性格が荒々しいものになっていったことについては、先にも触れたのでここでは繰り返さないが、彼らはこうした危険に、

自分の体力と知力等もてるものをすべて最大限に發揮して對抗していかなくてはならなかった。動物に自分をたとえたり、動物の動作のまねをしたのも動物のもつ無限の力にあやかりたいためであった。船頭たちはペストやコレラといった当時開拓地で最も恐れられていた病気に己れをたとえさえた。当時西部で何が怖いといっても病気ほど怖いものはなかった。そういったものにさえ己れをたとえて、最も怖いものだと虚勢を張ったのも、言葉による自己主張、自己拡大を極限にまで押し進めて、己れをとりまく現実の激しさに對抗しなかったからにはかならない。そしてその叫びが激しい中にも、はつきりとユーモアが見てとれるのは、彼らの生得の喜劇精神と合体したものと考えてよいであろう。新しい天地、いや宇宙をも己れのものとしたといった意気揚々とした自覚が船頭たちの生んだユーモアに一貫して流れている。そしてその好例は先の「ミシシッピー河上の生活」の中の船頭たちの絶叫である。

彼らの喜劇的自己表現は言葉の上だけにとどまらなかった。彼らはまた数々のユニークな肉體表現によって内心に沸騰するものを表現しようとした。

その一つに跳躍があった。跳躍は船頭たちだけでなく西部人の最も好む行為だった。それはあり余るエネルギーから生れたが、何よりもまず農産物に関し豊作への願望、つまり作物が彼らの背丈を越えて成長してほしいという願いを象徴したものであった。しかしこの象徴的行為は農作地帯だけでなく西部人全体の共通儀式のようなものとなり、オハイオ川やミシシッピー川の船頭たちも船の上でさかんに跳躍して己れの体内の仰えきれぬエネルギーをユーモラスに発散した。

射撃によって腕前を競い合うことも西部人にとって最も大きい喜びであった。しかし跳躍と異なり、この方はマイク・フィンクという一人の超人の偉業として集中してしまった感がある。おそらく多くのライフル銃の名手がいたことであろうが、民衆の想像力はそのほとんどをマイク・フィンクのものとし、マイクを様々の栄光の飾りでつつんで彼を

半神にまつりあげ、己れの願望を彼において結晶化した観がある。

西部のユーモアは「荒々しいユーモア」の一語につきる。それは激しく衝動的で、それでいて憎めないユーモアである。それは生々しい人間関係、大河上の激しい生活、新しい時代を築きつつあるんだという感慨などを母胎として生れた人間くさいユーモアだった。クロケットのユーモアが人間がひとり大自然に直面して生きることから生れた神秘的感じすらするユーモアとすれば、船頭たちのユーモアは何ともにぎやかなユーモアだった。それは下界の英雄豪傑たちの騒々しくも豪快な笑いの世界であったといえるであろう。